



## 4世代が集う食農体験活動

長野県長野市 天空の里 いもい農場







長野市の善光寺近くから戸隠方面への道を進み、紅葉に彩られた山道をたどると20分余りで長野市の芋井廣瀬地区に到着する。眼下に長野盆地の市街地を一望できる絶景の集落は、まるで天空にのようなロケーションだ。

「天空の里 いもい農場」（代表：浦中綾子さん）は、この地区を拠点に子どもから大人、シニアまでの幅広い世代を対象に、食農体験の場を提供している。11月中旬に開催された「食農体験2025・第14回」は今年最後の収穫活動となり、参加者は大人60人、子ども47人の計107人と、静かな集落が親子で賑わう1日となった。

朝8時、いもい農場の活動拠点である芋井社会会館に運営スタッフが集まり、事務局長の西沢さんを中心に段取りを確認する。今回は、リングゴ（フジ）の収穫と、野菜の収穫の2グループに分かれて収穫作業を行う。また、畑の片付け、焼き芋、さらには天空カフェと天空マルシェも予定される。9時になり参加者が集まると、収穫作業の説明や野生動物への注意喚起、さらに、今回初めてとなるリングゴジュースの販売を子どもたちがマルシェのお店番に立って販売することがPRされた。

「それでは、畑にレッツゴー！」西沢さんの元気な掛け声を合図に畑へ向かう。リングゴ畑に着くとフジが一面にたわわに実り、参加者からも歓声が上がる。前回のリングゴ（シナノスイート）収穫作業の反省を生かし、この日はあらかじめ収穫と選別に役割分担。「B級はどこですかー？」と男の子。大勢の参加者が収穫し選別作業が追い付かないほどだ。

隣の畑では、白菜、ネギ、カブ、ダイコン、チンゲン菜、野沢菜などが収穫。「白菜の巻きが足りないかな？」とスタッフの松木さん。今年の白菜はヨトウムシにより多くの被害を受けており、自然条件や生育状況がスタッフで共有されている様子だ。長野市内から一家で参加する金澤さんは「今年から子どもが畑仕事ができるようになり成長を実感しています」と笑顔を見せた。

運営スタッフには、いもい農場が登録する「ながの地域まる







ごとキャンパス(主催・長野市)を通じて大学生も参加。今回で5回目の参加となる薬師さんは「1人でも参加しやすく、世代の違う人と自然に話ができるのが魅力」と、この場合はコミュニティをつくる大切なきっかけでもあるようだ。

作業のあとには会館の前で天空カフェと天空マルシェが開かれ、一般社団法人ながの移動販売つなぎ局を通じて派遣されたキッチンカーが2台並び、いもいも農場で育てたジャガイモを使ったコロッケは完売となった。マルシェでは、運営スタッフの子ども(運営スタッフジュニア)がりんごジュースなどを販売し、活動資金づくりにもつなげた。地区住民が立ち寄り買い物を楽しむ姿も見られた。

午後には、運営スタッフと有志20名ほどが残り、傷のあるリングゴを使ったリングゴチップ作りが行われ、輪切りにし乾燥機で加工する作業も行われた。運営スタッフで1年の活動を振り返る時間も設けられ、作業の進め方や収穫のタイミングなど意見が交わされ今年の活動は一区切りを迎えた。

天空の里 いもいも農場は、2014年にボランティア有志4人で発足。前身は生活協同組合が行っていた食農体験活動で2013年度に活動を終了したが、「せっかくの畑を耕作放棄地にしたいくないという思いから活動が引き継がれた」と副代表の山崎さんは振り返る。年間約15回の食農体験を中心にした活動を行い、種まきから収穫まで農作業の一連の流れを体験できる。また、収穫物を使いみんなで調理し暮らしが豊かになるような気付きの場とする活動を組み立てている。

こうした活動の基盤にあるのは地域との関係づくりだ。畑や田んぼをお借りするには、地域からの信頼が欠かせない。芋井地区住民自治協議会と相談し、芋井社会会館を拠点として使えるようになったことで、人が集まり活動を継続できる環境が整った。

運営スタッフで前代表の五味さんは地元芋井集落の住民で、前身の生活協同組合が行う農場の頃から参加を続けている。地元住民として「集落では久しく子どもの声を聞いてなかった







けど、いもい農場がはじまり、この集落で子どもたちが楽しく活動してくれるのがとても嬉しい。地元の受け止めも大きく変わったと話す。

「信頼してもらうためには、活動を可視化して伝える必要がある」と西沢さん。ブログやSNSでの発信に加え、活動通信を月1回、地元集落の回覧板として全戸配布している。西沢さんは、もともと生協職員として前身の農場運営から関わっていた。こうした経験を地域活動に活かし、いもい農場の活動後には毎回グーグルフォームを使って参加者の感想を集めている。「参加者の声を運営側だけで終わらせず、中山間地でも人が集まるとこんなに楽しい時間が生まれる事実を発信したい」という。参加者には「家でどんな話をしましたか」と問いかけ、家庭の会話の種をまくことも意識する。

コロナ禍でも、屋外活動であることに加え、グループ分けで畑に分散して開催するなど活動運営方法が進化し、結果的に活動がより大きくなったという。できることをできる範囲でやり、作業の進行具合や天候の状態に応じて、計画にこだわらず柔軟に変更している。

「活動を続けていた結果、地域がにぎやかになっていった」と自然体の活動を積み重ねてきたいもい農場。ここでの体験から、子どもたちはどんなことを受け止めてくれるのだろう。この日の活動が終わり、参加者が帰路に着くころ、会館前の坂道に運営スタッフフジュニアたちが集まる。車が1台ずつ山道を下っていくたびに、「バイバーイ!」「またねー!」と子どもたちは全力で声を張り上げる。最後の1台が見えなくなるまで、誰に言われるでもなく、子どもたちは両手を振り続けていた。

**【連絡先】**天空の里 いもい農場  
 TEL : 090-9358-3286  
 メール : imoi.hirose@gmail.com  
 詳しくは、ブログ・Facebook・Instagramをご覧ください

